

---

# 裏世界の死神少女

鶉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

裏世界の死神少女

### 【NZコード】

N8248D

### 【作者名】

鶴

### 【あらすじ】

死神だった少女は今、普通の高校生と変わりない平穏な日常を送っていたはずだった。“裏世界”になど、もう行かない。そう誓っていた。だが…ひとりの少年と出会った事で少女は再び“裏世界”に呑まれていく。…そんな…哀れな死神の物語……休載中

## プロローグ（前書き）

初めての方も、他の物語を読んでくださっている方も、こんなにちはー！小枝 莉乃です (\*^-^\*)

この物語をお皿にかけていただき、ありがとうございます(\*^-^\*)

『お家の国のアリス』と並行させていただいているので投稿の日安は約一週間程を目標とさせていただきます。

文面等、つたない面がございますが、これからも死神少女をよろしくお願いします^ ^

では、はじまりはじまり～

# プロローグ

僕らがお前を手放すと思う?

もう

…お前がいないとダメなんだ

お前がいないと…

再び闇が壊れてしまつ

この世界の神

罪人に死を

お前が必要なんだ

だから

戻つてこい

死神

お前は…逃げられないんだ

この世界から

この運命から

ああ、僕らのために

：

殺戮の…死神

## 第1夜 日常

月も隠れた闇の世界

己の欲望を満たすため

闇夜で蠢く影ひとつ

放課後の校舎にバタバタと騒がしい足音が響く

+

「…なんとしてでも連れて来い。」

「はい」

「俺には…あの力が必要なんだ…失敗は許されないぞ…」

「…はい」

+

「由子……早く……図書館の席なくなつたやつ……」

前を走るは、おてんば姫こと天羽 結衣

「結衣は体力バカねえ、そんなんじゃまた小林先生に怒られちゃうわよ?」

この微笑みながら歩いているほつが金沢 由子

「大丈夫だつて……ほらつもつすぐだよ……」

「あら? 結衣、前…」

「へつ?」「  
ドンッ!」

「うわああ?…」

「…つ…！」

「…」

ちょうど廊下と階段の角の部分。出てきた人物と結衣がぶつかり倒された

「…あら」もちろん結衣が押し倒したよつこ

「う…あいたたた…あつ」<sup>ヒヒ</sup>「ぬくなさーーー。」

そんな状態に気付き慌てて離れた結衣

「あ…大丈」

「」<sup>ヒ</sup>あらつ天羽…あ・れ・ほ・び・廊下は走るなどありや  
……お前はいつもこつも…つ…」

「すみません…」

「小林先生…まあ落着いて下さる」

「金沢あ…お前も学級委員なんやから注意してやれや…」

「だつて言つたつて聞くよせんもの」

「わい一年にもなるのじいじにできんかのよ…」

眉間にシワを寄せ、ビクンと考へる素振りを見せる

「無理ですね。」

「バッサリやな…」

「それより小林先生?」

「ん?なんだ?」

「彼は転校生ですか？」

結衣が倒した人物を指差す。今はもう起き上がり、ついた埃を落としている

「？」

指を指しているこちらに気付き微笑んだ

「ん？ああそうだ。今校内案内の途中でな。全く…天羽に邪魔されちまつたわい。営業妨害や」

「いや！…あ、あたしのせい？…しかも、なんか使い方違つしつ！」

「細けえこたあ気にするな。お前ら図書館行くつもりやつたんやろ？」

「あ、はい」

「今日は大目に見てやるさかい、はよ行け」

シツシツと手を動かす「ばやん

「動物扱い！…」

「それを言つなら邪魔者扱い…」

「邪魔つたりばめやん……」

「邪魔や」

「ひどい……」

耳に指を当てる間に素振りをする「じばやん

「……それじゃあ先生、私だけ行きますね」

「おう、氣をつけに行きや。その猛獸に」

「なにおうへー。」

「つぶつぶ……氣をつけます」

半ば由子に引かずりながら図書館へと消えて行く

「……面白い人達ですね」

「ああ、見てるとな。相手にする疲れるだけなんやが……まあ学生のつちはあれくら一元氣があつたほうがええ。お前さんもや」「せん

「んじや案内に戻ろか」

「あ、はー」

歩き始めるふたり

「それにしても……高校になつて転校とは珍しいなあ」

「え……あ……」

「まあいろいろ事情があるんやうおな。無理せず頑張りんしゃい」

「はー。ありがと「ひざれこまか」

「あ、じいが……」

+

「あれ……律？」

図書館に入ると真っ先に目に飛び込んで来た人物がいた。

同じクラスで由子の幼馴染み… 高梨 律！！

「……んあ？」

「 もおーーー行くなら言つてくれたつていいじゃんーーー」

「は？ 知らんがな。 なんで言わなあかんねん」

「「冷たいなー」」

やつにいつ荷物をどかして向かいの席に座る

「……なんどいこ座らねん。 別の場所行けや」

「えーねこでんだからいこじゅーん」

「他に席もないしねえ……私たちに帰れってのい？」

「……せあ……つかれへすんなよ……」

確かに席は満席。 準は諦めたようにため息をついたので  
あらうノートのまとめを再開

「えーな」「一？ 勉強？」

「ん。 家じややらんし、バイトもあむかさ」

「テスト期間中にバイトかあー……余裕しゃくしゃくハイハイ。」

「……せあ。」

「終わったら見せてね」

「……自分でやれや」

「冗談よ。自分でまとめたほうが分かりやすかったやつだの」

「……う」

「あ、あたしレポートやらなきゃ……資料探ししてくるね~」

そう言い席を立つて去つて行く結衣

「ふふふ……律も可愛いわねえ」

「…………は？」

くすりと由子が笑つ

「ああ言いながら……結衣のためでしょ？」の席取つたの。あの子の  
お気に入りの席だしねえ」

「なつ……！」

みるみる顔が赤くなつていく律

「ふふつ健氣ね。まああの子の一番は私だから？」

「おめう……」

「ただいまあ~へ~どうかしたの~？」

両手で五冊程抱えて帰つてきた

「おかえりなさい。なんでもないわよ」

そう言つた由子に対し、律はうつむき手で顔を覆い隠している

「… うつへ。」

まあいいかと思つたよつて、席に座り資料を読み始める

「私も勉強しないとなあ」

由子が呟き、今日配られた数学のテスト範囲の冊子を解き始めた

+

五時になりました。用の無い生徒は…

「ん? … もう五時か」

顔を上げた律がふと前を見ると

「……ぐる……」

といへずを終えた由田子が寝ていて

「パフ……パフ……」

レポートを机の上の結衣が資料を読みふけっている

「……由田子……起きる……」

「ん~」

「結衣……借りなさい返して……」

「……」

「おこひ……」

「んあ?」

ふたりして間抜けな声だ

「五時だ……片付け……」

吹き出しがなるのを堪えながらつ

「え? せつ? 五時?」

「ね。せつから片付けた。」

「えつ……ひみつ……ひみつ……」

バタバタと走り去る結衣。『館内は走らなさいよ』と聞けたのは気のせいではないだろ。

……俺は保護者か……

+

図書館を出た帰り道

「ニヤー、本読んじゃうと止まんななくてさー」

「あれ資料やん……?」

「結衣にひとつては資料も本も対して変わらないわよね

「えへへー」

苦笑氣味に笑う結衣

「でもそんなんじゃレポート書けへんやん」

「あ、それなら大丈夫～頭に内容覚えてるから～」

「…まあじで？」

「そうよね～結衣の記憶力にはびっくりしちゃったわ。得意レベル  
じゃないんだもの。あれは一種の才能ね」

「やつなんや……」

「…あら？ もしかして知らなかつたのかしら～『めんなさいね～悪  
い』としちゃつたかしら～」

「…なんの」とや

ここつ絶対わざとや…と思いつつシラをあわる。ここつは俺の反応を  
みて楽しんどるんや…

「いいえ？ なんでもないわ」

そんな様子を笑う由子

「なによ～どうしたの一人共？」

「…コレには関係あらへんわ」

「…なつなによーーその言いかたあーー」

ムツとした顔になる結衣

「確かにその言い方はないわね…」

呆れた由子

「う、う…」

うろたえる律

「 もうちょっと言こ方考えなよねーーあたしは凶太い神経してるからいいけどさーー」

「 そりねえ…好きな子に嫌われちゃうわよ?」

「 なつ…?！」

「えーー律好きな子いるの?…!」

「 はあ?…!」

焦りながら由子を一睨みする律

「 結衣、たとえ話よ」

「 ムツと笑つて言つ由子

律は内心ヒヤヒヤだ

「そ…そか…あ…好きな子出来たら真っ先に教えてね…出来  
るだけ協力するから…！」

「はあ？…遠慮しとくわ…」

「なんだよーつ?！」

「だつてなんかへマしちゃうやじ」

「う”…」

「あ’’あ’’あるの’’」

「ん~…微妙に心当たりな’’」

「あ’’、じゃあやめたまづがいいわね。邪魔な’’じてこと悪’’な  
ど」

「邪魔つてオイ…」

「うふふ。冗談よ[冗談]

「はあ…」

「ん~、でもや」

「」「？」

「出合いがないよね～」

「ん～まあ確かにそりうね」

「一年も経てばほほほ全員顔見知りやしな～」

「転校生とか高校じゃあんまり来ない…って、あ、そりうれう

「ん? どないしたん?」

「今日転校生見たんだよ～…ねつ…」

「へえ?」

「男子でね、金髪の蒼田で…律と同じくらいの高さかなあ?  
確かにそれくらいだった気がするわ」

「ふ～ん?」

「そりうれう、しかも結衣ったらぶつかって押し倒しちゃうし…」

「はあ? !」

「あつあれば事故だもんつ」

焦りながら正する結衣

「あの後ひばりんにも怒られたし…ほんとシイでない…」

## しょがっこぬ結衣

「あ~り~。仮分擔ねちやつたかしら~。」

「…別」

あかられおにムスッとこころの律

「やれにしだも…」

空を見上げながら独り言のよつとポンシと極く

「なんかどつかで見た」とあるよつな仮がするんだよね…」

「わつやあ金髪蒼田のやつなんとかもはやだいじでわかるやん。仮のせことわやつん?」

「…わつかなあ…?」

「知らん」

「なんかが律ヒヅー…」

「わづねえ…少なくとも私は知らないわ」

「はは…わつか…わづねえのせこかなあ~。」

「考へても玉こじのやつらのせこかなあ~。」

「わづねえ結衣が思こ出せないなんて珍しこねえ…」

「あーー！そだよね！！一回会って話した人なら覚えてるはずだもん  
！…やつぱ氣のせいだ～」

「解決してよかつたわね」

「うん…」

笑いあうふたり

分かれ道

「んじゃ また明日な～」

「ええ 気をつけてね」

「由子も…じあね～」

それぞれ帰りの道を進む

… 空に雲がかかる

まるで、光を遮るかのようだ。

## 第1夜 日常（後書き）

感想など頂けたらと思います (\*^-^\*)  
こばやんと律はいろいろな方言が入り交じっちゃつてるとお思い下  
さい。(\*^-^\*) ふがいないながらも頑張っていきたいと思いま  
す!!

## 第2夜 不穏

雲に覆われた太陽がカーテン越しに鈍く光る  
その光は、いかにも誰かが寝ているであるひべットを静かに照らしている

「…」そと寝返りをうつらしき音が聞こえる。

…と、そこに一頭の…犬よりも大きい…犬に似て非なる生き物が入つてくる

「ウォンー！」

『バフツ』

「ぎやぶ？」

白い一本の足がベットのふくらみに落ちると…同時に寝ているらしき人物の潰れた声が聞こえた

「ウォンー！」

「… ゆ… ゆき… ? … 後五分… むにゅ むにゅ…」

「クゥン…」

ユキと呼ばれたソレは再び眠りにつきやうな飼い主に対し悲しそう

な声を上げる……と同時に

『ドスツ』

「つ……ぐえつ……」

ベッドの上に乗った

「お……重……」

ウォンー！

無邪氣そうな声で吠えながらじつまをブンブン振っている

「…くつ…」

ガバッと布団を持ち上げ起きる結衣  
ユキはヒラリと床へ下り立つてこる

「うーー…」

寝ぼけつつ、寝癖で爆発した頭をぽりぽりかきながら時計を見る

「…ん？」

八時

「んー？」

八時一分

「八時い？！」

布団をはねのけて慌てて着替え始めた

「うわーんっ 遅刻、ギリギリじゃんっ」

三分で着替えを終わらせた結衣が階下へ降りようとすると、階段の下にはいつの間にか移動していたユキがしつぽを振りながらエサ入れをくわえて待っていた

「はいはい、今用意するからちょっとどぞいてね~」

そんなことを言いながらパタパタとキッチンへ入って行く

「あれ? クロ! なんでこんなところに?...」

キッチンへ入るとテーブルの下にいたもう一頭に向かつて声を掛け  
る。名前からわかるように黒い。

ユキから受け取った器にエサをいれ、置いてあるクロのまつにも入  
れておく。

「水も用意したし...」

洗面台に駆け込み五分で出て来る

「じゅあ畠山みのりしぐね……行つてきまおす……！」

バンシと音を立てて閉まるドア

【……毎朝慌ただしいな……】

【わいわいですねえ～】

【もひーひー睡りするかな……】

【あ、じゅあクロの分の朝ご飯にいただきますね】

【それはあかん……】

【…ふふ】

ガラガラガラガラ

「はあ……はあ……」

「あれ？ 結衣じゅん……おはよーーー！」

「えへへおはよーーー！」

クラスの子と一緒に話交わし、席へと向かう

「よかつたわね、間に合って」

由子が笑顔で話し掛ける

「うんー。ゴキが起しちゃくれたんだあー。」

「ゴキって…あの白いわんちゃん?」

「あ、うんー。そうそうー。」

「よかつたわね」

ふふっと笑った

そんな中、女子たちの会話が耳に入ってくる

「そういえば今田が、うちのクラスに転校生くるんだってー。」

「えーーー・マジ?・男?・女?・」

「男ー男ー金パツだつてーーー理沙好みだつたりしてーーー」

「えつーーーちよつとマジ惚れたらどうしようーーー」

あはははーーーとゆう笑い声は学校中に響き渡る勢いだ

「…転校生って昨日の…?」

「たぶん、ううね。ひのクラスに来るのりじこわ

「ほくーー」

「座るとしたら結衣の後ろでしうね、空いてるし……いいわね……窓際の一一番後ろ……」

「あはは……つて……あれ? 律は?」

由子の後ろの席を見て尋ねる

「さあ? まだ来てないわよ~ 遅刻でしょ」

ガラガラッ

ドアを見ると小林が入ってきた

「お前ら席つけ。今から転校生を紹介するさかい。終わるまで黙つとけや~ 質問は最後な~。んじゃ入れ」

全員が席についたのを確認すると転校生らしき人物に声を掛ける

ガラガラガラッ

「……おつ……セーフ! ?」

息を切らせながら入ってきたのは……

一同沈黙といひ名の冷たい視線を向ける

.....つ

「……わやはははーー律かよーー」

「ちよつとー冗談やめてよね～」

クラスから沸き起る笑いの波

「高梨い…望み通り遅刻にしてやる」

「は?ーなんでやん!ー?」

「五秒で席つかへんかつたら欠席な

「わーーちよつちよつ」

ガタガタと音を出しながら席につく

「うー、とりあえず全員やな…海里ーー入ってーー」

「あ…はー」

開け放たれたドアから入ってくるのは金髪、蒼田の昨日結衣と由子がみた人物

「海里 流架です。ようじへ」

「はい、拍手」

ようじへーの言葉と共に拍手がパチパチと起る

「海里の席は…」

ふと結衣の後ろを見る

「あー…今空いてるところないけん、下から持つてくるとかことりあえず地べた座つとけや」

「…え?」

予想外の展開だったのだろう…田が丸くなる流架

「ちょつ…」ばやん…あたしの後ろの席空いてるんだけど?…  
イジメ?…これイジメかなあ?…」

机から身を乗り出す結衣

「ああ、悪い。天羽のせいで見えんかったわ。もうちょっと瘦せえ。  
小林は悪びれもなく言い放った

「ヒドい…」

「えじや、海里はあの「めぐれ」の後ろな

「は、はこ」

返事をして席へと移動する

「あ、そうだ、学級委員、立て」

「…はい？」

「あ?」

由予と律が立つ

「あー…高梨もだつたか」

「んなー?」

「だせーーーーー忘れられてるよーーーだつてお前柄じやねえしなあーーー」

「う…るせーーーーーお…」

「う…あなたはなーーー」

また笑いが巻き起つ

「…少し黙れや。」

…小林の一聲で教室が一瞬で静まる

「んじやー学級委員、どうでもええから慣れるまで面倒みてやりいや。ああ校内案内はしたからな。んじや終わりな授業行け」

そう言い残し担任は出でていった

「くわおー」ぱやんめつ

いなくなつた直後由子のまづに体を向け、誰に言つわけでもなく結衣が呟いた

「小林先生は結衣で遊ぶのが趣味だからねえ……声の調子が高くても無表情だけど……」

「むう……こんど仕返しちゃあ……」

「ふふ……頑張ってね。」

微笑む由子

「あ、やつやつ……」

由子が流架に向き直る

「海里くん……？」

「え？ あ……はい」

「学級委員の金沢　由子です。よろしくね」

「あ、あたしは天羽　結衣だよ～覚えてね～」

「あ、はい。よろしく……」

「俺は高梨　律だ。よろしく～」

隣りから口を挟む律

「よろしくね。高梨くんはもう覚えたよ

「こいつと微笑み話す流架

「…まあ…」

「うん」

「だつてあれじゃね～誰でも覚えやつよ…」

「そうね…インパクトありすぎたわね」

「お前も人の」と言えないだろーが…昨日と今日で…」

「あはっ…あははは…！」

引きつった笑いを見せる結衣

「あ、そりだ…！…それより済しゴム貸せ…お前2個持つてたやう

…！」

「え？うん…はい…！」

筆箱を開けてすぐに手渡す結衣

「サンキュー」

「海里くん…教科書はあるの？」

「あ、いえ」

「そり…じゃあ律に見せてもらつとこ…わ

セツノヒツヒツるうちに先生が入ってきた

+

## キー・ンゴー・ンカーンゴー・ン

「…つお昼…！」

伸びをしながら結衣が叫ぶ

「ふふ。そんなにお腹空いたの？」

「昼にしようぜ～ジ」で食べる？

「そうね…海里くんもいるし…」

流架のほうをみると

「うわ～…」

ひと、人、ヒトで周りを囲まれている

「ん～…遅かったかあ～」

「そうねえ…とつあえず避難しましょ～つか…」

やつ言い、ドアへと向かう田子

「…………」

大丈夫かなあ……と振り返りつつも田子につこひゆく結衣

「田子……俺いら」ぱやんに頼まれてるやうが……」

「じゃあ頑張つて連れてきなさいな。私にはあそこで割り切る勇気はないわ」

「うう」

「あー……あの……高梨くん……」

「……く?あ?うん?」

ドアの前で話していたところ、  
声を掛けられまぬけな声をあげてしまつ  
見ると流架が立ち上がりつたてこつちを見ている

「あのう一緒にお食べてもいいかなあ……?」

不安げに尋ねてくる流架

「ん? いいぜー」うひひこよーーー

パツと顔を輝かせ周りの子たちに、ごめんねーーと謝り、走ってきた

囲んでいた団体から、えー、とか、なんでもーとう不満の声が聞こ

える

「じゃあ行きませうか」

「うそー。」由子が教室から出て行く後をついていく

「てか、海里、よくあん中ひたち来れたなあ～」

「あはは、結構勇氣必要だつたんだけどね。僕ああゆうの苦手なんだ～」

「へへ～」

「あ、でも高梨くんたちに声掛けのも勇氣必要だつたんだけどね  
流架が少し笑いながら話す。この四時間の間で律とは打ち解けたようだ

「確かに最初だとね～勇氣いるよね～」

「でも、私たちはあなたのこと任せられてるし『兼ねなく話し掛けていいわよ』

微笑みながら話す由子

「あ、そだ海里くん？」

「はー?」

「お皿は持つてる~？」

流架の持つてきている鞄を見て尋ねる結衣

「朝、『ンンビ』で置つてきたからあつますよ~」

「じゃあ屋上で平氣だね~」

階段を上り、屋上についた。

階段の上の屋根に座りお弁当を広げる

「…ずいぶん大きい袋だけど…なに買つてきたの…?」

流架の出した袋を見て結衣が尋ねた

「えっと…メロンパンとコロッケパンと焼きそばパンと親子丼と鮭イクラ鉄火丼とナポリタンスパゲティです」

「…おお…よく食べるね~律並み!…」

「いや、俺でもここまで食べねえぞ…?」

「え?…やせっぱつまことですか?」

「やうね、お相撲さん並みかしら?」

「あはははは…!」

笑う結衣と微笑む由子。律と流架も笑う

「ああ、俺それより気になつてたことあんだよ

「どうかしたの？」

「海里、お前の呼びかたや

「え？」

「俺、丁寧語嫌いなんよ。だから一丁寧語禁止な。つまらない言葉で呼  
び」

「律～まだ来たばっかりじゃん～」

「俺がいやなんじやー！…なんかむずむずすんねんー…」

「え、でも…高梨くん」

「律」

「あつ…」

「律」

「つ…律…くん」

「”くん”はよけこじやー！…」

ちやぶ返しのじぐわを見せる律

「あははははー！…おもしろー！…」

ふたりを見て爆笑する結衣

「こりなりは無理があるわよ律。くん付けでもいいじゃない

「ん～」

「あ、でも僕…頑張りますーー。」

「あ、そりゃじゅああたしの「ヒは結衣つて呼んでね～」

「えつ」

「ああ、私は別になんだって構わないわ」

「だめ～つーー由トは由トなのーーー。」

「あひ…」

「決まりねーー海里くん」

「あーほつ

「うぬ?ーー」

「それじゃ意味ないやんけーー俺も流架ついで呼ばな

「あーーとかーーみるしへね流架ーーー。」

「あ、はーー」

「はこじゅなくして、うさ

「あ、うんーー。」

はにかみながら笑う流架

「それじゃあそろそろ戻りましょうか」

みんなが食べ終わったのを確認して立ち上がる由子

「そだね～」

それぞれ荷物をもち立ち上がり、教室へと帰っていく

+

教室へ戻った四人に待っていたのは異質な沈黙だった

「いつもあそいで食べてるの?」

「うん～みんながお昼あればね～無かつたら学食行くナゾ～」

『学食の『親子丢スペシャル!』なにが出るかはお楽しみ!』

「うわー、あつたな。600円するんやナビマジウマニでーー。」  
「んでも食べてみーーこや、明日はでも行くかーー！」

「……え？」

「おっ！…！それええな！…！」

「あ……あの……」

ふたりで盛り上がりまして、流架の声は届いていないようだ

ああなつたらもう止められないわよ~」

- 3 -

「結衣と話してるとねえなんか世界が出来ちゃうからして…周りの音が入つて来なくなっちゃうのよ…律にも言われるわ。一種の才能かしらね」「

ふふつと笑う

「才能：ですか？」

結衣を見る流架の日の色が変わる。だが誰もそれに気付きはしない。

「あ、そうだ由乃さん

「ふふ……なんか違和感あるわねえ……なにかしら?」

「えつ……あつ……」これからも一緒にお昼食べてもこことじょいつか…」

「あら、そんなこと聞かなくていいわよ。ふたりのはしゃぎっぷりを見なれ。移動まで一緒よ」

笑いながら話す

「よかつた…」

「あ、でも別にこやすことじょいが出来たらひとつだけ行っても構わないからね?」

「あ、はーーーーあつがとつぱれこまかーーーー。」

「あと、一言語も直さなきゃね」

「あ……うつ……うふーーー。」

ガラガラガラッ

ドアを開け、中へ入る結衣と律。ふたりはまだしゃべり足りないらしく、入つても一、三歩しゃべつていたが、教室の一瞬で変わった空気に気付かないわけがなかつた

「「…?」

静かな……張り詰めた静寂……物音もえしない

「……なんや？なんかあつたん？」

近くにいた男子のほうを見ても田縁を逸らされる

また、辺りが静まり返る。

その静寂を破つたのは先程、流架を取り囲んでいたグループのリーダー的存在・有菜だった

「流架くうん……なんでそんな奴らと一緒にいるの？」「流架以外の三人を睨みつける有菜

「「「」」」

そう言い、手を引つ張つていぐギャルっぽい子がひとり

「え……あの……」

クラスの中心でギャルっぽい子たちの声が響きはじめる  
少しがこちなさは残るもの、空気は本来の教室のものへと戻つて  
いった

「……なんなんやねん……」

呆然と立ち尽くしている結衣を隣りに毒づく律

「女って怖いわね。とりあえず席に戻りましょ」

歩きだす由ナ

「結衣？大丈夫か？」

座つてもボーッとしている結衣を見て声を掛ける

「…え？あつ…うん…びくつしだけ～…」

あはつと笑う

「それにしても…まだいたのね、ああゆう人たち…」

ちりつと見ながら氣付かれないよつて感く

「そやなあ…わいも小学、中学までかと思つとつたで～高校までき  
て幼いなあ～」

「俺もびびつたわあ～つて」「ほやんつ～…」

いつのまにか…律の隣り下でヤンキー座りをしている小林がいた

「あら、小林先生…」

「「ほやんじや～ん」

「気配なかつたで今…お前らなんで驚かんなん?…」

「せや、普通もつといふんで～」

「え…だつて入つてくるとこ見えたし」

と結衣

「すみません……あまり感情が出なこもので……」

微笑む由子

「あー……皮肉に取らんでもくれな? わやつかいら」

「とつあえず……流架……どいつにかせえへんとひなあ……」

「拈りて言ひてたもんね……」

「まあ、本当に嫌になつたりなんとかするでしょ?」

「せやけど……あつやあ流れれる性格っぽくないかあ?」

「確かになあ……」

「様子見……ね……」

「「ひ」——」

「彼が私たちに助けを求めたら連れ出しましょ

「……ひん  
「せやな」

「「ひ」、じやあ授業はじめんで席つけ」

周りから…てか、中心から、え~とかゆう声があがる  
流架が戻ってきた

「大丈夫だつた？」

小声で話し掛ける結衣

「うん、なんとかね。メアドとケー番、教える事になっちゃつた」

苦笑いする流架

「そかあ…いつでも頼つていいいんだからね？」

「せや、頼れな」

「うん、ありがとう」

少し話した後結衣は前を向く。だつて、さつきの女の子が数人、  
こっちを見ていたから…

+

H.Rも終わり、皆が帰宅する中、結衣は小林に呼び出され、資料室  
に来ていた

「ふたりは委員会だし…流架は連れ去られちゃうし…家で勉強でも  
するかなあ～」

独り言を呟いていると、小林が入ってきた

「悪いこな、待たせて」

「んや、平氣だよ～」

「じや～最近の調子はひいて見ての通りか」

「うふ。心配い無用～」

「そりゃ心強い限りで…せや、あの狼どもは元氣なんか？」

煙草に火をつけながら尋ねる小林

「うふ～元氣元氣」

「ふむ…久々に会ってえな…うし、今夜行くわ

「こきなつっすね～」

「ヤツとしなががら葉を返す

「何時に来る?」

「せやな…十時から一時の間にいくわ。起きてるやつ～。」

「うわ～教師の言葉とは思えない～」

笑いながら言ひ

「まあ副職やし、ええやん」

「えじゅ待ってるね～」

部屋を出て行くとある結衣

「あ、せせせ……」

「んっ。」

「……………せこひん後にするわ」

「ナハニ?」

じゅあね～と言こ外へ出て行く結衣

足音が聞こえなくなるのを確認したあと、棚から一冊のファイルを取り、開く

そこには、由子の[真]と細かな字でびつしじと可事かが記されていた

夕闇の中、窓を叩く一陣の風

枝が揺れ花が散る

傳ぐ

あらがう術もなく

咲かせても

咲かせても

：崩れ去る

## 第2夜 不穏（後書き）

え～…お読みいただきありがとうございます（^ - ^）

第2夜を書いている途中で文が少しおかしいところがあり、直そう  
と思ったのですが…どこに隠れてしまったのか探しても探しても見  
つかないのです（^ - ^ ;）

見つけ次第、お知らせ頂けたら…と思います…

私も探しします！…もちろん…！

でわ、恐縮ですがよろしくお願ひ致します

m (— —) m

### 第3夜 予兆

風が枝を揺らし

ザワザワと音をたてる

「な～んか嫌な風やな…」

ふうっとため息をつき煙草を持つ手を下ろす

とある家の玄関前に鞄を置き、持っていた携帯灰皿で煙草の火を消す

ふと…視線を感じ、その家の庭先を見る…と、いつからいたのかこ  
つちをジッと睨んでいる黒い生き物がいた

「おー…クロ。久しぶりやな…出迎えか?」

話しかけるがソレからの返事はない

ただ静かに…しかし、いつでも襲いかかれるよつこ…ただ、じつと…見ているだけだ

数秒間、睨み合ひをしていると、上方から物音がした

「あれー~! ばやん?」

声に振り返つてみると屋根にいた白い狼と目が合つた

声の主は…いない

ユキと見つめあつていると横で人の気配がする

「…いつまで突つ立つてんの? 風強いし早く中入る~」

そう言い彼女は立て掛けであつた鞄を持ちドアを開ける

「ああ…悪いな結衣」

全員が入るのを確認した後、結衣がバタンとドアを閉めた

「二頭の狼に前後を挟まれ部屋に入る

「座れば？」

後ろから結衣の声がしたがソファに鞄を置いてどこかに行ってしまったらしい。

「はい、『一ヒー』でよかったです？」

上着を置いて座ると、じぱりくして結衣が姿を見せた  
両手にはカップを持っている

「んあ、サンキュー」

受け取り、飲もうと口に近付けると…なこやう足下がくすぐったい

見るとユキが鼻をスンスン鳴らし臭いを嗅いでいる

「なんやユキ」

呼び掛けるとユキはこちらを見上げしつぽをパタと一振りし、向かいの結衣の隣りへ行き、伏せた

「いばやん来たの久し振りだからね。警戒されたんじゃない？」

「警戒されてるのはこつものことやナビな~あの黒このこは

「クロは仕方ないよ~」

あはは～と笑いながら語る

「アハ～こや焱が見えんけど？」

「えりかにいるえりかでないっ。」

「…えか」

「……で、なんの用事で来たの？」

早く話せと炎が語つてくる

「んあ？ああ……」

顎に手を当しながら考へてくるようだ

…数分間の沈黙のあと、口を開く

「…こいつがあるやけど…全部が全部お前さんの友達の話や」

「…うん？」

表情から察するここに話しへなことひだ

「えりか…軽いとかり…」

「うそ」

「…高梨は…ほら、お前がこっち側に来たとき元気だったやろ？十中八九…間違いなく関西のスペイやつて。」

「けど…目的を見失つてるとか、記憶喪失か…でしょ？」

「ああ、調べてもそれらしき動きはない。こっち側になるにしても、わいになにかしら連絡がないのはおかしい。やからこれはただの確認や。現状は変わらず保留な」

「うん。」「

「まあ…見てる限り害はないが、注意するにこしたらない」

「んで、あの転校生のことはナビ…」

「流架？」

「そや。調査結果はどうりんが…俺の勘が正しければ…黒やな」

「マジで？…確かに見たことあるとは思つたけど…」

またか。という表情でソファに深く沈む

転校生が結衣を狙つてきたことはこれが初めてではない

「ふむ…まあ…お前は死神やつたからな、それは仕方あらへん。とりあえず、結果出るまでこれも注意」

「…わかった」

「……んでなあ……金沢の[.]となんやナガビ……」

「……うん……？」

「……ここにくわづに小林が額に手を当てひつむく

「白い」とは間違いないんやが……向いの側……裏が一枚噛んでき  
とるみたいなんや」

「……は？」

結衣の眉間にシワがよる

「……由子が？」

「いや。正確には金沢の親父さんの働いてる会社なんやけど

「……なんでそれに由子が関係するの？」

ピコピコとした空気が発せられる

「……まあ聞け。……その会社がやつてんのがヤクの密売なんよ。だいたい、小規模の会社は関係者辺りで順番に回すはずなんや……そこだつて例外ではなかつたんやけど、今回……なぜか知らんが金沢の親父さんに手渡されたゆう情報が入つてきとん」

「なんで？」

「理由はまだわかつとらん。誰かの差し金か……偶然か……金沢の親父さんが仲間に入つたってことはない。脅されてもいなければや。」

「……怪しいと思わないのかね？」

結衣が盛大なため息をついた

「まあ良い話ネタに話つけたんやろ」

「まあ……預かるだけなら問題なくない？見つかんなきゃこい話だし。会社側も損するわけだから対策は練つてるはずでしょ？」

「まあ、そのはずなんやが……あっちの策がわからんせかい、いくつかパターンあげとかなならん。最悪のケースだつて考えられる。」

「最悪のケースね……」

「ああ、例をあげてこくとやな、  
・やり方を変えた  
・自分達が危険になつたから一時避難  
・または  
・なにもしていないと装つたために社員に全部かぶせて逃げるため  
まあほかにもあるんやうけど……大々的に出るのはこれじゃやう」「どれにじり……喫き付けられたらヤバいのは由子のとこだよね……」

「やうやうやうやうやうな」

「はあ……バンビ（一般人）はこれだから困る……」

「そやな……自分では被害を減らしてゐつもつやうやうな……関係あら

へん奴巻込んで被害拡大させちやる

「お仲間意識が強い」とド～

「せや、お前はどうなーする?」

「ん?由子だけは守るよ。他は知らない。引退した身だし……あんたの仕事だしね?」

「わか。…金沢　由子に便乗してその家族も守ってくれたら俺…むつちや楽なんやけどな～…」

ダメかあ～?っと呑みつつ遠回しに呟つてみる

「あたし、体二個あるわけじゃないから無理。まあ…」

「うん?」

「なんとかしてみるよ」

「恩に着るわ～」

「んじゅ貸しひとつね」

ホッとした笑みを浮かべながら小林が胸をなで下ろした

ニヤッと笑みを浮かべる結衣  
小林の笑顔が一気に崩れ去った

「……へい」

+

「…はい。今のところは問題ありません」

〔セツカ〕

「あの計画が問題なく動けば彼女を引き戻す種になります」

〔ふむ…楽しみに待つているよ〕

「はい。必ずや成功させてみせます」

〔ルツ〕

電話を終えたと同時に玄関の鍵を開ける音がする

ガチャ

「ただいま～」

香氣な声が家の中に響き渡る

「あ、おかえりなさい縁香さん」

「おひ～？流架…早～じやん」

「やつですかね…？」

時計を見ると…六時

まあ、確かに早い方ではある

「情報屋の端くれとしてはまだまだね～。ちやんとなんでもいいから情報を集める。」これは基礎だよ～

「…縁香さんはほんと仕事熱心なんですね」

「ん～…そがな？」

ソファにジカツと座る縁香

「ビール持つてきて～」

「はー」

キッチンへ入り、缶ビールを手に戻る

「さんわね」

受け取ったビールを開けると、ぶしゅつといい音がなった

「それにしても、緑香さんもいつもより早いですね？」

「ん？ ああ…ちょっとね…」

それ以上話さうとはしない

「流架、腹減った。なんか作れ」

「はい」

キッチンへと再び姿を消す流架

それを見届けたあと緑香は深いため息をついた

+

前の日の午後、お昼過ぎ

「あれ、金沢さん？ どうかしたんですか？」

今現在、潜入調査中の会社で親しくなった人がいる  
主に自分の世話係りをしてくれていた人だ

その人が今、見慣れないトランクケースをもつて身支度をしている。  
それが金沢さんだ

「ん？ 今日は早番なんだよ～」

「いや、それもありますけど…」

「ああ、呼び出しのことかい？なんか上の方からね、このトランク  
ケースを預かつて欲しいと言われてね」

そう言い、そのケースを見せる

「…へえ？ なにが入ってるんですか？」

「いや～ それが、中は見るなど注意を受けてね… 私も知らないんだ  
よこれが」

「え… それなのに受けたんですか？！」

なんて無防備なんだこの人は…

「いや、まあ大丈夫だろう。それじゃお先に失礼するよ」

あははと笑いオフィスを出る金沢。

その後ろ姿をただ… 見ていることしか出来なかつた

あれは……たぶん俺の探しているモノだ：

となると、俺は彼に手をかけねばならない……

再びため息をつく

すると夕飯が出来たのだろう流架がおかずをもつて入って来る  
エプロン付きでだ

「できましたよ～今日はチャーハンです！～！」

そう言ひテーブルに置いてゆく

行つたと思つたらまた顔だけだして

「縁香さんも手伝つてくださいねーーー！」

そう言ひまた消える

「いJの時だけ忘れてもいいよな……」

そう呟き、立ち上がりキッチンへ向かう

聞こえるのは楽しそうな笑い声

自分の慕っていた人を手にかけなければならないかも知れない……そんな辛い想いはまだ忘れていいよう

夜の闇のように……再びそれが訪れるまで

……願わくば……そうならない事を祈つて……

## 第4夜 齒車（前書き）

この話は小林が結衣の家に行く前の話です

## 第4夜 歯車

”gīeām”

そこは、情報の店

†

カラソカラソという音と共に入口を開けると青暗い店内。中は横長に広く周りには四角や丸のテーブルやイス、奥の正面には半円型のカウンター。中にはバーテンダーが2～3人入っている。  
：まだ早い時間だから人は少なくグラスのあたる音が心地よく響いている

俺は田舎でのバーテンがいない事を確認し、心中で舌打ちしながら適当にカウンターに座った。

そろそろいい時間になり、大した収穫もないのでもう行こうかとほんやり考えていると、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた

「あれ？ 小林？」

その声が店内に響く

見るとキヨトンとした顔で立ちぼつかいでいる男がひとつ… 前は五十嵐 緑香。

黒い髪は少し高く後ろで一つに束ねていて、中性的な顔が目立つ。普段は見慣れないースーツを着ていて、どことなく新米ホストのよくな感じだ。…まあ、手に持っているのはサラリーマンとかが持つているようなバックなのだが

「…五十嵐か」

聞こえないくらいの声で呟いてカウンターに向き直る

「無視か！！」

叫んだ五十嵐がズカズカと歩み寄ってきて隣りに座った

「なんで隣りに座るんだよ…」

嫌そうな顔をする小林

「べつに一久し振りなんだからいいじゃん」  
バーテンになにやら注文しながら答える  
嫌そうに言われたのに動じていなによつだ

「好きにじる」

正面に向こうりグラスに一口、くちをつけた

「そりゃや、最近調子どひよ」

五十嵐が顔を覗きこんできた

「…至つて健康やで」

無表情のまま言葉を返す

「ヤーじゃなくて、仕事の話…。」

カウンターをバンバン叩きながらキーキー言っている

「…別に」

「あれー?今凄く大変な時じゃないのかなー?」

にまつと顔を歪める五十嵐  
小林は静かに相手を見据えた

「…なんの話や」

「しらばっくれても無一駄。俺の情報網甘く見ないでよね~。知つてんだから」

「…なにを」

「狙われてるやろ? あのお嬢ちゃん」

獲物を見つけたように瞳の奥を輝かせる

「それがどうした。今に始まつたことじやない」

グラスに入つた酒を一気に飲み干す

「やうなんだらうけど、これまでと規模が違つと黙りつよ?..」

「……どうこいつ意味や」

「今までほんづかのバカが自分の知名度上げたいがために狙つてた訳だけど、今回は違う。」

トーンを抑えた声で話す

「へえ?」

「お嬢ちゃんの周りで被害に遭つてゐる子…このんじやない?..」

「いや…今ことひせおひりんで。見当外れやな」

ふんつと鼻を鳴らす

「あれー？ おつかしいなー…」

眉をへの字にして、頭を搔く五十嵐

…昨日の今日じゅまだ動かないか…

「お前の無駄話に付きたまつ氣はない」

席を立ち、店を出るために出口へと向かう

「ちゅう… なにかあってからじゅ遅いんだぞ…」

叫ぶ五十嵐に足を止める

「じゃあ、それについて確かな情報をお前は持ってるんか？」

「……持ってるさ。じゃなかやアンタに話したりしない」

真剣な表情で小林を見据える

「ふん…聞こいつじやないか

席に戻り、座り直す

「つまんねえ話だつたら帰るからな」

バーーンが差し出したウォッカを手に取る

「金沢 由子。聞き覚えがあるはずや、なんせアンタのクラスでお嬢ちゃんと付き合つてる数少ないお友達だからね」

「…そいつがどりした」

「ああ、俺がとある会社に潜入調査に入つたんだ。そこで俺の世話をしてくれた人が金沢 優さん。<sup>すくる</sup>彼女の父親だな」

「……それがなんの関係があるんや」

「話はこいつからや、その会社がヤクの密売疑惑でな、そこんとこ調べてて…」

「なんでお前の仕事の話を聞かなあかんねん」

ガタツと立ち上がる「するとすると」と

「ちよまあつ…（ちよつと待て）…」

思いつきつ上着を捕まれた

「金沢家が殺されるかも知れないんだよ…」

「…は？ なんでそこに金沢家が関わってくるんや

「人の話は最後まで聞け」

チツと舌打ちをし、掴んでいる手を払いのけ再び座り直す小林  
「昨日の事だ。金沢さんが呼び出されたんだよ。そこまでは別にいいんだ…けど、戻ってきたら行くときは持つてなかつたデカいトランクケース持つててなあ…」

「預けてたとかじやないん?」

「たぶんそれはないな。聞いたら会社から預かつたって言ってたしそれに、俺が鼻利くこと知つてんだろ?あれは間違いなくシャブだ…」

「んじゃまあ…考えられるのは大きく考えて3つやな…」

小林はタバコを取り出し火をつけた

「バレそうになつてヤバいからとりあえず隠すため、今まで関係者内で回していたが、やり方を変えた、関係のない奴を巻込んで全ての責任を負わせる…はたまたそのための保険か…いずれにせよ、バンビには荷が重いな

ふう…と煙をはく

「ああ…考へても嫌な結果しか出でこない。」

五十嵐をみるとどどく暗い表情をしている

「で?お前はどうしたい?俺に話すんだからな、余計な事考へてん

だろ」

「……もし、殺されたよひなり。やひゆひ話なひ。……やつたいかな」

「やつぱし。お人好しやな。たかが面倒見てくれたくらいで」

「小林はあの人のお人好しきを知らぬからんな」と言へんだよ」

「知りたいとも思わへんけどな」

はまつと五十嵐は苦笑する

「アンタのやつみつといひ変わってないなあ。必要なもの以外無関心つての?」

「…せやな。いらんもんあつたつて邪魔なだけや」

「やうの言つて消された奴等が何人いる」とやら

「ふん。……で、お前は俺にじつして欲しい。俺ひとつじや出来る事は限られてるで」

「ん? ああ ……出来る」となり金沢家のの人達を守つて欲しいと思つてんだけど……」

「おじおこ、俺が3、4人いるならともかくひとりなんやから無理があんで」

その言葉に五十嵐はキヨトンとした顔になつた

「え？ アンタのことだから顔広いし協力者とかいると思つたんだけど…じゃなきや…あの死神を守りきれるわけ…」

「五十嵐」

「え？ …あ…」

慌てて口をふるぐ。

今、裏の世界では死神は行方知れずとなつていて、それに関わっているものはその名前を呼ぶこと、その情報の流出を禁じている死神が開放を望んだ。…それを快く思わない者から遠ざけるために

五十嵐もまた、それに関わった人物のひとりである

「…あこつは余程のことがない限り自分の身は自分で守れる。俺がしてゐるあこつに關しての情報を乱すべからこや」

「ふうん…流石だねえ…お嬢ちゃんは…」

…死神と呼ばれていただけはあるな…

「んな」とせどりでもいこんだよ。金沢の件や」

「ああ……やうだよ……おれんなよ……」

はつ……とした顔をする五十嵐

「忘れてたのはお前や」

呆れてため息をつく小林

「……協力してくれんのか?」

「まあ、金沢　由子が関わってるなら仕方ない」

「まじか……恩に着るわ……」

感きわまらないとゆう顔を小林に向ける

まつ…眩しい…

きつと犬のしつぽがつこいたなら千切れんばかりに振つているだ  
けい

そんな光景が頭の中に浮かび、ふ、と微かに笑つ

持つていたグラスの中身を飲み干す

「ギャラは今日の酒代でええで。じゃあな

そう言葉を置いて立ち上がり去つて行く小林

「なんかあつたら連絡するわ！－」

扉を開けている小林に投げ掛けると片手を上げひらりと揺らし、夜  
風と共に消えて行つた

+

外へ出ると紫の空が黒に染まっていた

あの情報は本当だつたのか…

歩きながら空を見上げてなにか考えているよひだ

「パズルピースはもう少しありがるな」

ふつ……と微かに笑いを浮かべた

全てが繋がったとき……

お前は……どうなってしまつだらう……

## 第4夜 齒車（後書き）

更新が遅くなっています……めんなさい（――・・m

そして、この話は不定期更新になつたのです……ご迷惑おかけします。o・r・z

しかし、必ず更新はしていくので、どうかよろしくお願いします（・・・・）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8248d/>

---

裏世界の死神少女

2010年10月10日03時52分発行